

# 幼児言語の語彙

—色彩語の場合—

吉田 則 夫

## ○はじめに

幼児期の言語生活の実態を、語彙の側面からみると、興味深い対象の一つに色彩語がある。幼児にとって、色彩語は、果物や動物などの具体物の名と比較すると、いちだん、抽象的な段階にある語彙と言える。反面、「きのう」「あす」「このあいだ」などの時間語彙や、「みぎ」「ひだり」「うしろ」などの空間語彙と比較すると、それらよりは具体的な面がある。つまり、「赤」「青」や「黄色い」「黒い」などの色彩語が用いられる表現の現場では、多くの場合、じっさいにその色が目に見えているわけで、その点、やや、具体的な性格をもつと思われる。したがって、色彩語は、具体的な事物をあらわす語彙と、抽象的な関係概念をあらわす語彙との、いわば中間に位置しており、その意味で注目すべき語彙分野と考える。また、色彩語は、比較的少数の語彙項目によって、一つの明確な語彙分野が形成されており、そのことは、「語彙」としての発達過程を、細かに検証してみるうえで、好個の対象領域と言うことができる。

## 1 考察の資料について

筆者の長男、<sup>トモ\*</sup>知樹(1976年12月3日高知市生まれ)の発話につい

ての記述カードによる。筆者は、妻との協同のもとに、長男のことばを、日々、観察してカードに筆録している。私どものカード記録は、毎日の生活の中で、随時、適宜、行われたものである。いちいちの発話の中から、カード記録の契機となるのは、幼児の言語生活の実態をみるうえで、その表現に、なんらかの質的な意味が認められると判断した場合に限られた。そのため、まったく同一の表現形式を、重ねて記録することは少なかった。私どもの記述カード資料は、一幼児の言語表現生活の、質的な面に意を用いたものであり、したがって、量的な実態をみるには、十分なものとは言いがたい面がある。

なお、私どものカード記録の方法と実際について、その一部分を公表している。(『幼児期の言語表現の実態——2歳5カ月期』高知大学学術研究報告 第28巻 1979)本稿では、そこにみられるような資料を含む、知樹(以下、Tと略称する。)の満3歳当日までの記述資料をもとに考察をすすめた。

さらに、野地潤家先生の大著『幼児期の言語生活の実態』I(文化評論出版 1977)、II(同前1973)を参照させていただくことによって、比較の視点での考察にも、すこしたち入ることができた。学恩を深くお礼申し上げる。

## 2 色彩語彙の習得過程

子どものカード記録によれば、Tが口にした色彩語の初出は、満1歳10カ月と14日の、次のような場面におけるものであった。〔 〕内は記述カードの通し番号。月齢は、経過した年月日を<年;月、日>であらわす。以下同様。

〔960〕 父が二本の赤鉛筆を持っていると、Tがその一本を取って、

○<1; 10, 14>カェー。(→父 1978.10.17 AM7:16 二階)

と言う。(とっさに、これは「赤い」の意と察した。) つづけてまた、その時、Tが首にかけていたタンバリンを指でさして、

○カェー。(→父)

と言った。タンバリンは周明が赤く塗ってあるのだ。いままで、色紙や色鉛筆で「赤」を教えたことはあるが、このタンバリンで「赤」を教えたことは、父母とも、一度もない。

「赤色」について応用ができた。

上記カード記録を最初に、以後、色彩語を含む発話は、〔表1〕のとおり、各月齢ごとに、量的にも、ほぼ、コンスタントに現れている。(表中の数字は、それぞれの月齢のカード記録にみられた色彩語の総数<のべ語数>である。)

言うまでもなく、私どもは、とくに色彩語に着目してTのことをばを記述したわけではない。にもかかわらず、各月齢ごとに、ほぼ、

〔表1〕 T 児 の 色 彩 語

年 月 齢	1; 10	1; 11	2; 0	2; 1	2; 2	2; 3	2; 4
のべ語数	1	5	6	5	7	5	9
	2; 5	2; 6	2; 7	2; 8	2; 9	2; 10	2; 11
	11	6	6	2	11	9	13

コンスタントに色彩語が認められる。このことは、おそらく次のような理由によるものと思われる。幼児は、日々、さまざまな「もの」や「ことがら」に対して、旺盛な関心を向けている。そのさい、「もの」や「ことがら」の色彩が契機となって、それらの対象に関心が向くことも多いのではなからうか。——幼児の初期の言語生活において、色彩語を含む言語表現が一定の割合であられることの意味を、このように考えてみたい。

ちなみに、『幼児期の言語生活の実態』I, IIによって、〔表1〕と対応する月齢の色彩語を抽出すると、〔表2〕のとおりである。(月齢のあらわしかたは、満年齢に変更して示した。)

〔表2〕 『幼児期の言語生活の実態』I, IIの色彩語

年 月 齢	1; 10	1; 11	2; 0	2; 1	2; 2	2; 3	2; 4
のべ語数	0	3	0	9	22	5	7
	2; 5	2; 6	2; 7	2; 8	2; 9	2; 10	2; 11
	10	5	4	2	7	12	8

上に推察したことがらは、この場合にも、基本的には当てはまると考える。なお、[表2]の2歳2カ月の語数が相対的に多数であるのは、たまたま、この時期が葎の季節であるため、葎の話題が多く、アカイ(15語)が頻出しているためである。

さて、次には、それぞれの色彩語が、Tのことばとして発せられた月齢を、まず、一覧しておきたい。以下には、いちいちの色彩語の意味の実質にまではたち入らないで、単純に、それぞれの語形の初出例をあげてみる。もっとも、私どものカード記録以前に、それらの語が発せられ、記述もれとなっている可能性も、当然考えられるが、本稿の考察においては、あくまでも、カード記録本位で通して考えていくことにする。掲出にあたっては以下の記載方式にしたがう。

- (1) 「アカ」に対して「アカイ」などの、名詞形と形容詞形とは、それぞれの、独立の色彩語としてあげる。
- (2) 語形態が不完全な場合でも、その語の初出例とみなす。その場合、のちにあらわれる完全な形態を( )で示した。
- (3) 特殊形と認められるものを[ ]で示した。
- (4) 原カードの発話の記述は、センテンスアクセントをつけてあるが、以下の語の掲出にはアクセントを省略した。

[表3] 色彩語の初出年月齢

<1;10, 14>	カユ	赤い
<1;11, 12>	アカ	赤
<1;11, 13>	アオ	青
<2;0, 12>	(アカイ)	(赤い)

<2;0, 12>	ピンク	ピンク
<2;0, 26>	キー	黄
<2;1, 17>	キーロイ	黄色い
<2;1, 19>	マシロ	真っ白
<2;1, 23>	マクロ	真っ黒
<2;1, 23>	チャイロ	茶色
<2;2, 10>	ミド	緑
<2;2, 25>	クロイ	黒い
<2;3, 9>	(マックロ)	(真っ黒)
<2;3, 13>	アオイ	青い
<2;3, 23>	(ミドリ)	(緑)
<2;4, 9>	(キーロ)	(黄色)
<2;4, 19>	キミドリ	黄緑
<2;5, 10>	ベージュ	ベージュ
<2;5, 26>	ミカンイロ	みかん色
<2;5, 27>	ムラサキ	紫
<2;7, 8>	(ベージュイロ)	(ベージュ色)
<2;7, 8>	シロ	白
<2;7, 8>	ダイダイイロ	橙色
<2;7, 8>	ハイイロ	灰色
<2;7, 20>	[シロイロ]	[白色]
<2;7, 20>	[アオイロ]	[青色]
<2;7, 25>	シロイ	白い
<2;9, 14>	[ウスイロノミドリ]	薄緑

- <2 ; 10, 8> トーメー 透明  
 <2 ; 11, 7> [ミドリク(ナル)] [緑の形容詞的用法]  
 <2 ; 11, 10> ハダイロ 肌色  
 <2 ; 11, 21> [ハイロク(ナル)] [灰色の形容詞的用法]

以上の初出例を、月齢ごとにまとめて、見やすく整理したものが  
 [表4]である。

[表4] T児の色彩語習得状況

	1; 10	1; 11	2; 0	2; 1	2; 2	2; 3	2; 4
名詞		赤・青	ピンク ・黄	茶色	緑		黄緑
形容詞	赤い			黄色い・真 っ白・真っ 黒	黒い	青い	

	2; 5	2; 6	2; 7	2; 8	2; 9	2; 10	2; 11
ベージュ ・みかん 色・紫			橙色・灰色 ・白 [白色] [青色]		[薄緑]	透明	肌色
			白い				[緑] [灰色]

この表によって、次の諸点を指摘することができる。

- (1) 色彩語の習得は、1歳の末頃から始まり、2歳の終わりまでには、ほぼ、主な色彩語を習得する。
- (2) 色彩語彙の習得過程は、原色(赤・青・黄など)の語彙項目から、中間色(緑・紫・灰色など)の語彙項目へ、という傾

向が認められる。

- (3) 名詞と形容詞とが平行に存立する色彩語の場合、両者の習得は連動する傾向が認められる。

以上の三項は、幼児言語における、色彩語の習得過程についての、かなり一般的傾向であろうと予想している。

次に、以下の諸点は、T児の個別的な特徴と考えられる。

- (1) 「ピンク」の色名の習得は、2歳0カ月の初期段階であり、その使用度数も少なくない。(ちなみに、Tの3歳までの発話に「桃色」の語形は無い。)おそらくこれは、Tが気に入っているおもちゃに、カラーの積み木やブロックなどがあり(その他のおもちゃも、カラフルなものが多い)、ピンク色のそれを、赤のそれと弁別する必要上、いち早く、この語が習得されたものであろう。初期の段階で、中間色とも言える「ピンク」の習得が行われたのは、「赤」の影響が大きいものと考えられる。
- (2) 2歳5カ月には、「ベージュ」という特殊な色がみられるが、これは、Tの周囲に、いくつかのベージュ色の「もの」があったことが作用したと考えられる。たとえば、母の化粧品ケース、居間のカーテン、父がいつも着ていたジャケット、小さなゴム人形のお相撲さんなど、Tはこれらのベージュ色の「もの」に対して、よく興味を示した。その結果、特殊とも思われるこの色彩語を、比較的はやく習得しているのである。
- (3) 2歳10カ月の「トーメー」については、この特殊語を習得する明らかな契機があった。Tは、2歳半頃から、いろいろな

ホース類に、異常なほどまでの関心をもつようになった。おもちゃ箱には、青・黄色・緑色の水道用のビニールホースや、青・橙色のガス用のゴムホースが、たくさん収められていた。その中に透明のビニールホースもあったのである。Tにとって、これらのホースを区別するのにその色名は不可欠なものであり、「トーマー」の語詞もまた、ごくしぜんに身についたのである。

以上の三項は、色彩語の習得過程上の、Tにおける個別的な側面である。「ピンク」「ベージュ」「トーマー」の色彩語については、これらの事情を不問にしたまま、語彙習得過程の位置づけを行うことは正確ではない。要するに、生活基礎語としての性格をもつとみられる色彩語彙においても、その語彙の習得過程は、一般的な面と個別的な面とが交錯しており、それを正しく見分けながら、語彙の発達過程を分析していくことが肝要となる。

なお、『幼児期の言語生活の実態』Ⅰ、Ⅱにみられる色彩語を、[表4]と同様の整理によって示せば、[表5]のとおりである。

[表5] 『幼児期の言語生活の実態』Ⅰ、Ⅱでの色彩語習得状況

	1; 10	1; 11	2; 0	2; 1	2; 2	2; 3	2; 4
名詞				青	赤・真っ赤	白・緑	
形容詞		赤い			白い・黒い・青い・[真っ赤い]		

2; 5	2; 6	2; 7	2; 8	2; 9	2; 10	2; 11
黄色い						

さらに、大久保愛著『幼児言語の発達』（1967 東京堂）によれば、同著の対象となったY児の色彩語の習得の実態は、次のようである。

[表6] 『幼児言語の発達』におけるY児の色彩語

2歳前期	2歳後期	3歳	4歳	5歳
赤	白	緑 黄色 茶色 桃色 おとこ色 おんな色	青 紫色 うす緑 うす茶色	焦茶色 こい空色 空色 藤色 肌色 鼠色

[表5] [表6]によれば、満3歳以前の色彩語の習得は、[表4]に比較して、いずれも、きわめて限られたものである。この理由は、よく分からないが、次のようにも考えられるのではなからうか。[表5]は、昭和20年代前半の調査、[表6]は昭和30年代前半の調査であり、本稿の対象であるT児の調査（昭和50年前半）よりも、それぞれ、30年前、20年前の調査である。その間、一幼児をとりまく環境にも大きな変化があり、その影響は大きいと思われる。毎日、カラーテレビをみながら育ち、カラフルな、さまざまのおも

ちゃや絵本に恵まれて育っている現代の子どもは、色彩に関して、幼児の初期段階から旺盛な関心をもつことは、思うに、しぜんなことではなかろうか。[表4]と[表5][表6]との間にみられる、色彩語の多寡の要因を、ひとまず、このように時代差と解釈しておきたい。

### 3 色彩語の特殊形態

次の記録は、Tの2歳7カ月期のものである。

[3209] Tはおしっこするために父といっしょにトイレに入る。父が、緑のビニールテープを巻きつけてある握り棒を持つように言うのと、Tは、それを「アオイロ。」と言い、すぐまた、「ミドリイロ。」と言い換えた。そして次には、白い壁をさして、

○<2; 7, 20> コレ シロイロ。(→父 1979. 7. 23 AM10: 05)

と父に尋ねた。

ここには、アオイロ(青)、シロイロ(白)という語形が認められる。これは、キーロやミドリイロやチャイロからの類推によって、アオやシロにも「—イロ」という後接要素をそろえたものである。このように、青や白についても、色名としての語形態を統一して把握しようとしているところには、色彩語彙としての認識の深まりがみてとられる。これはこれで、語彙力の発達の一つの姿とみたいのである。

さらに今ひとつ、大人の用法からすれば誤用とみられるもの、

注目すべき色彩語の用法がある。

[3622] 朝食に、魚の干物(沖うるめ)の焼いたのがでた。  
Tは、その白っぽい部分をさして言った。

○<2; 11, 10> コレ ミンナ ミドリク ナル ノ。  
(→父母 1979.11.13 AM8: 23)

[3652] Tは、裏庭に放り投げてあった、おもちゃの、青い乗用車のミニカーを拾ってきて、家の中に持ってきた。その青い色が、やや、あせかけた部分をさして言った。

○<2; 11, 21> コレ ハイロク ナッタ ネー。(→母 1979.11.24 AM8: 59 居間)

「ミドリク ナル」「ハイロク ナル」は、いずれも、2歳11カ月に初めて現れた用法である。「アカイ」「キーロイ」「アオイ」などが、「アカク」「キーロク」「アオク」となることからの類推によって、「緑」と「灰色」についても形容詞的に用いたものである。じつは、このような表現が生まれること自体、色彩語彙の習得過程の一段階をうかがわせる事実として注目したいのである。つまり、色彩語には名詞形と形容詞形とがパラレルに存立することを、幼児は、しぜんのうちに言語能力として身につけ、時には、大人の表現には無い表現までも、類推によって造り出したのが上の例である。しかも、そういうことを始める時期が、[表4]にみられる通り、ほぼひと通り、基本的な色彩語の習得を終えた2歳11カ月の月齢であることもまた注目に価する。

### 4 色彩語の意味の深化

幼児言語の語彙の分析は、言うまでもなく、幼児の言語表現能力の発達過程を明らかにするためのものである。したがって、たんに、単語の語形のみを外形的に分析し、整理するだけでは、覆いきれない面が残る。やはり、表現の現場にたちかえって、文表現の中での、いちいちの語詞の意味用法の實質を吟味する必要がある。色彩語についても、若干のことを言及しておきたい。

### (1) 青と緑

大人は、無意識のうちに青と緑との交替を行っているが、幼児にとって、その使い分けはかなり複雑な様相を呈しているようである。

[1160] 朝食時、Tは、かぶ菜の漬物をさして、

○<1; 11, 20> アオ。アオ。(→母 1978.11.23 AM 8:25)

と言う。母が「緑よ。」と言い直しても、依然として

○アオ。アオ。(→母)

と言い切る。

[2542] 父の枕カバーの、ブルーの太い縦線模様を見て、大きな声で、

○<2; 3, 23> ミドリダ。アオダー。(→父・自 1979. 3.26 AM 8:43)

と言った。緑を青と呼ぶことは大人の表現にも行われるが、このように青を緑と言ったのはおもしろい。たしかに、Tの頭の中で、アオとミドリとの概念が揺れているのだ。

[3602] 朝倉の国立病院前の国道の横断歩道には、手動式の信号がある。Tにそのボタンを押させて、しばらく待ってい

ると青になった。父が、「ヨシ。アオ。アオ。」(父→T) と言いながら、自転車を押して横断歩道を渡ると、乗っていたTが言った。

○<2; 11, 5> アレ ミドリ ヨ。(→父 1979.11.8 PM 8:56)

1歳11カ月では緑をアオと言い、2歳3カ月では、青をいったんはミドリと言い、すぐにアオと言い換えている。そして2歳11カ月では、交通信号の「アオ」という慣用的な呼称にも疑問をさしはさんで、ミドリと主張している。ここには、色の概念が明確に確立していく過程がみてとれる。もっとも、信号の緑色を「アオ」と呼ぶ慣用的な呼称を習得することは、それはそれで、さらに次の段階の語彙能力と考えるが、その前段階に、上のような明確な識別の段階があるものと思われる。予測をもって言えば、青と緑との慣用的な交替を言語習慣として獲得するのは、おそらく3歳以後のことであろう。

### (2) 赤と黒

色彩に、なんらかの評価を付与していくことは、意味の深化であり、語彙能力の上でも注目すべきことと思われる。その典型例として赤と黒がある。

[3556] Tは、ドライバーのケースから、プラスチックの握る部分が赤いドライバーだけを、母に渡して言った。

○<2; 10, 26> オカーサン オンチノコダカラ アカイノ。オカーサン ネー。(→母 1979.10.29 台所)

[3623] Tは、餡が包んであった赤いセロハンの紙を、食卓

についていた母の前に置いて言った。

○<2; 11, 10> オカーサン オンナノゴダカラ アカ  
イノ スキ。(→母 1979.11.13 PM1:05)

このごろ、「女の子」→「赤」と結びつけることが、しばしば  
である。

[3661] 大丸デパートの地階でTをトイレに誘うと、行くと  
言った。トイレのドアに、黒で男の人のマークがあるのを見  
てTが言った。

○<2; 11, 28> クロイノ オトコー。(→父 1979.  
12.1 PM2:48)

[3779] Tと母とがおしゃべりしていてももちゃの色の話にな  
った。

○<3; 1, 19> トモチャンワ ネ。アカガ キライナ  
ノ。オンナジャ ナイカラ。トモチャンワ ネー。アカ  
ガ キライナノ。(→母 1980.1.22 PM3:30)

最後例は、3歳1カ月のものであるが、赤についてははっきりした  
価値評価を下している。Tの場合、赤についてのこのような明確な  
評価意識は、色彩語からみた満3歳前後の一つの特徴とも言える。  
赤→女、黒→男と結びつけていくことは、しぜんのうちに、色にま  
つわる社会習慣を習得しているわけで、色彩語の意味の深化であり、  
とりまおさず、語彙能力の深まりと考えられる。

## ○ おわりに

以上の考察によって、色彩語という、小さなスポットライトによ

っても、幼児言語の習得過程は、それなりに客観視することができ  
たように思う。また、あくまでT児のケースに限られるが、色彩語  
彙については、ほぼ、満3歳という時期が、一段階を画するのでは  
ないかという見通しも得られた。T児の3歳以後のこと、さらに、  
ほかの幼児との比較については、今後の課題としたい。

(兵庫教育大学助教授)